



はぐくみ

《学校教育目標》 ゆたかな心とたくましい体をもつ子どもの育成

立花北小 校長室だより

令和7年1月24日発行
No.8「何でもしっかり食べる子に」
発行者：校長 佐野 正信

1.17のタスキをつなぐ

立花北小学校の子どもたちは、もちろん阪神淡路大震災を知りません。それでも、毎年の訓練を通して、地震の時は、机の下に隠れることを体で覚えています。今年の訓練では、揺れがおさまリ運動場への避難が始まると、全校生が動いているとは思えない静寂の中、子どもたちの足音だけが響きました。震災から30年間、毎年つないできた1.17のバトン、今年もきちんと引き継ぐことができました。

例え生まれていなくても、経験がなくても、自分事としてしっかり想像力を働かせ、いつかまた必ずやって来るその時には、自分の命をしっかり守り、困った人に寄り添える…、そんな人になってほしいと願います。



机の下への一次避難



運動場への二次避難

少し先の自分をつくる 何でもしっかり食べる子に！

今週は『給食週間』です。月曜朝の給食集会では、調理師さんをお招きし、委員会の子どもたちから、調理士さんへ感謝のお手紙を贈りました。私からも、2つのお話をしました。

<作ってくださる方の思いを>

毎日、あたりまえに食べている給食も、育てる人、運ぶ人、そして、献立を考える人、調理する人…と、たくさんの人たちの努力で、初めて目の前に並びます。「好きだから食べる」「嫌いだから残す」…ではなく、作ってくださる方のことを考えて、何でも感謝して食べられる子になってほしいと思います。これは、給食のことだけではありません。レストランでも、お家でも同じですね。

<少し先の自分のために>

ゲームやスマホは、電池が切れたらどうなりますか。全く動かなくなりますね。ではヒトの体は、どうでしょう。食べなかったからといって、急に心臓を止める訳にはいきません。だから、ヒトは、体中からエネルギーをかき集めて命をつなぎます。でも、中身はボロボロになっていき、力が出ない、イライラする…など、健康に過ごすことができなくなっていきます。将来、赤ちゃんを産んでお母さんになる人もいるでしょう。お腹に赤ちゃんができたらちゃんと食べる…では遅いのです。少し先、将来の自分のために、何でもしっかり食べられる子になりましょう。



給食集会のひとコマ



給食放送をする5年生

立花北小では、毎日の給食時間、委員会の子どもたちが職員室にやって来て、給食放送をしてくれます。担当の子どもは、栄養士の先生と一緒に内容を考え、その日のメニューの栄養や食の文化等について紹介します。そして、最後はいつも「全部の食材を食べられるよう心がけましょう」の言葉でしめくります。

最近、給食の時間に教室をまわっていて、うれしいことが増えました。それは「きらい！」「食べたくない！」と平気で言っていた子が、「校長先生、今日は全部食べられたよ！」と笑顔で伝えてきてくれるのです。担任の先生たちが、量を少し減らしたり、お代わりを継ぎ足したりしながら、毎日毎日、完食を目指した給食指導を続けることで、子どもたちの中に、努力して食べようという気持ちが育ってきているのを感じます。



お代わりを配る担任の先生



見事に配膳する3年生

『食育は人づくりの基本。口から入れる食べ物は、自分の体を作り、自分の体を整えてくれる。自分のために働いてくれる食べ物を「きらい」「まずい」と食べない子が、どうして人と仲良くできようか。』その昔、尊敬する先輩教員から教えていただいた言葉です。子どもたちが、いろいろな食べ物と仲よしになれるよう、お家でもどうか「給食、好き嫌いしないでちゃんと食べようね！」と、お声かけいただけると有り難いです。

校長：佐野 正信